

渡良瀬遊水地エリア検討部会

多様な主体の連携による取組みの 先行的事例について

平成29年3月9日

①千葉県野田市における事例

●連携による取組みの内容

市内の冬水田んぼにおけるコウノトリ採餌環境調査

●調査の目的

野田市内の水田及びあぜにおけるコウノトリの餌生物の生息状況を調査し、コウノトリの野生復帰に向け、生息環境としての野田市の水田環境の状況を把握するとともに、今後の課題と改善策を検討することを目的とする。

●発注者

野田市

●実施者

東邦大学理学部・長谷川 雅美 教授
(公財)日本生態系協会 ほか

●調査期間

平成26年度～



●平成28年度調査の実施体制

(代表者)

長谷川 雅美 教授

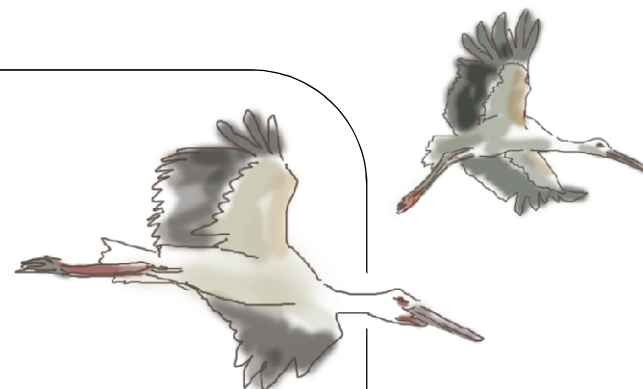
(調査支援者)

東邦大学 学生

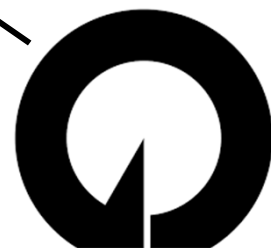
東京環境工科専門学校 教員、学生

関東地方整備局

(公財)日本生態系協会



連携





平成28年度調査地点位置図



調査の様子



●調査の方法

水田調査（水生生物の調査）

各水田の畔際に計8箇所の採集ポイントを設け、Dフレーム状のタモ網を用いて、水と底泥を一緒にすくい取り、採取した水生動物の個体数等を記録する。※

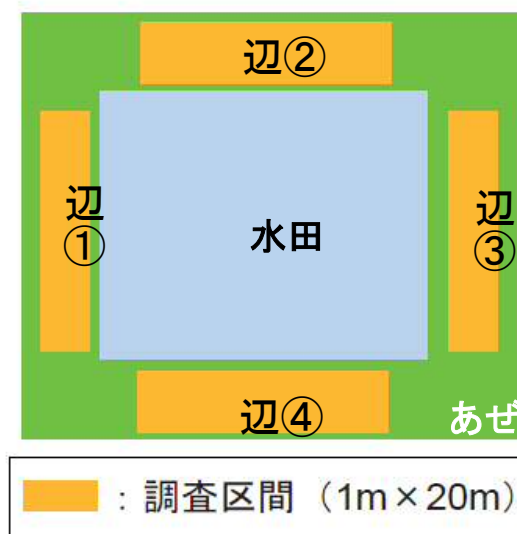


魚類（ドジョウ等）、カエル類（アマガエル等）、甲殻類（アメリカザリガニ等）、昆虫類（ゲンゴロウ類等）など

※ 「拡散すくい採り法」と呼ばれている

あぜ調査（昆虫類、カエル類の調査）

各水田の畔4辺それぞれに、長さ20m×幅1mの調査ルートを設定、各ルート上に出現する陸生動物の個体数等を記録する。



カエル類（アマガエル等）、バッタ類（イナゴ類等）、爬虫類（ヘビ類等）など

調査の結果をもとに、水田1アールあたり、あぜ1メートルあたりの生物量を算出する

●調査の方法



水田の調査

たも網を用いた“拡散すくい採り”法



あぜの調査

昆虫類・カエル類の目視確認



関東統一の調査手法となる予定

●調査で採捕された生物の例



カエル類幼生(オタマジャクシ)
水生昆虫類、巻貝類
(水田調査にて)

2015年6月 野田市目吹地区



オンブバッタ
(あぜ調査にて)

2015年10月 野田市江川地区

●取組みの輪の広がり(平成29年度実施体制(検討中))

東邦大学 教員、学生

東京環境工科専門学校 教員、学生

関東地方整備局

(公財)日本生態系協会

大正大学 教員、学生

株式会社LIXIL

29年度実施メニュー(案)

6月、8月・・・環境調査

秋、冬・・・環境管理作業



環境管理作業イメージ

出典:豊岡市HP



②田中調節池における事例

●取り組みの内容

千葉県・田中調節池におけるコウノトリ採餌環境調査
(平成16年にコウノトリ飛来実績あり)

●実施日

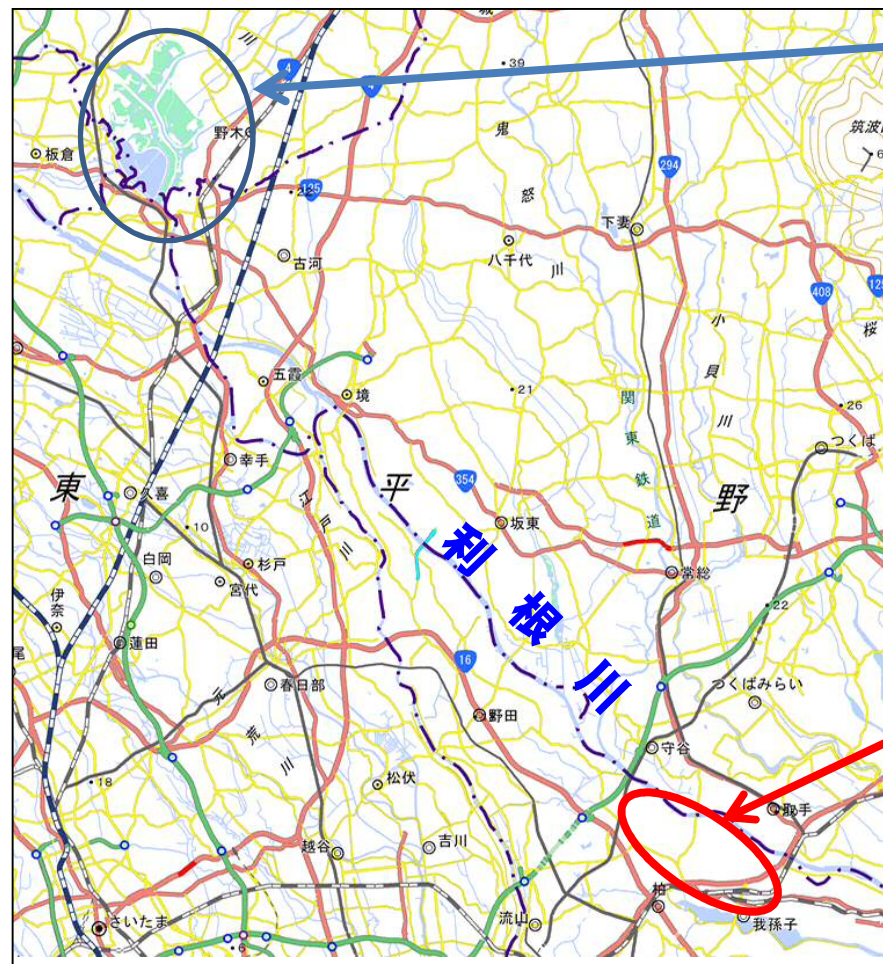
平成28年9月4日



平常時は農地利用されている



平成13年9月台風15号時



渡良瀬遊水地

田中調節池

●田中調節池におけるコウノトリ餌生物量調査 調査実施地点



●調査の実施体制

東邦大学 教員、学生
関東地方整備局
利根川上流河川事務所
江戸川河川事務所
(公財)日本生態系協会
環境調査会社2社



あぜの生物調査

関東統一手法
(予定)による
環境調査を、
多様な関係者
が共同で体験
した。

(稲刈り直前で水田が乾燥していたため、あぜの生物調査のみ実施した)



あぜの草丈確認調査

渡良瀬遊水地エリアにおけるテーマプロジェクトとしての 水田の生きもの調査



実施により期待される効果

- ①市民が自分の住む地域の生物多様性の現状を、自らの手で明らかにすることができる
- ②市民が現場の様子を目の当たりにすることにより、生物多様性を育む農法による安全・安心な農産物への理解が深まり、それらの普及拡大につながる
- ③多様な環境問題に対して市民の主体的な行動を促すための第一歩となる
- ④自治体単独での調査の企画、準備、発注と比較して、モデル地区を設定し、みんなで連携して調査することで、負担が軽減される



ICEBA2016のなかで開催された
「日韓田んぼの生き物調査交流会」の様子